Wakaba F.C.指導方針

●コーチの約束

【基本編】

1　まずは楽しむ。

「指導する」「教える」という言い方は責任が重過ぎる。あくまでもボランティアで子供たちと一緒に余暇活動を楽しむことが大切である。

2　安全第一を肝に銘ずる。

どんなに素晴らしい仲間やクラブであっても死者や大事故が起きると、皆の夢が散りクラブの活動は崩壊する。

3　プレーヤーズファースト

判断に迷った場合は『選手にとってはどうか』『選手の将来にとってはどうか』という視点で判断をしたい。例えそれによって手間が少し増えたとしてもである。ただし、この言葉が独り歩きし、『指導者より選手が先に帰るべきだ！』とか、『選手が一番偉い！』と勘違いする父母が出現することも注意したい。

4　時間厳守

集合時刻の5分前には現地に集まる。選手への指導では時間厳守を徹底し、自らも律する。遅刻するコーチの指導は説得力に欠け、他のコーチ、選手にも影響を及ぼすことを肝に銘じておきたい。

5　正しい態度で接する。

自分が挨拶をすることはもちろん、挨拶をしない子供を叱ることが正しい態度である。優しい笑顔だけでは正しい態度とは言えない。服装も指導者としての常識的な服装で指導にあたる。

6　共同作業

少年サッカークラブの指導者はサッカーを教える人（グランド）だけではない。ラインを引く人、審判をする人、グランドを予約する人、その交渉をする人、そのお礼をする人、近隣地区に対応する人等、多くの人たちに支えられていることを自覚し、表の顔であるコーチと裏方である審判や運営の両面をできるように努力する。

【練習・試合編】

1　何はなくとも挨拶をする。させる。

　コーチのチームプレーとして最も大切な『全員挨拶』を徹底する。『今日あったコーチ全員に挨拶したか？』を徹し、他学年の監督ｸﾞ、コーチにも全員に挨拶させるように徹底する。出来れば父兄、野球のコーチ、学校職員へも出来る範囲で挨拶することが望ﾉｿﾞましいと伝える。また、コーチ同士も挨拶を欠かさない。相手クラブのコーチ、会場責任者へは敬意を込めて握手することが望ましい。

2　ストレッチの徹底を行う。

　限られた時間で練習、試合を行うが、絶対に省略してはいけないのがストレッチング。試合が終わりミーティングしたい気持ちを抑えてストレッチをさせる。練習時間が短くなってでもこれを全コーチが徹底する。

3　怒鳴らない。

　安全を無視したプレー、約束、ルールを守れない選手の行動に厳しく叱ることは大変重要な指導である。また、時には大きな声でその重要性を理解させることは手段としては有効である。しかし、怒鳴って野次を飛ばしても子供は聞いていない。むしろコーチの信用を失うだけである。練習では『励ます』『褒める』『気付かせる』『叱る』を基本とし、決して感情的な発言はしないよう努める。（練習でも出来ていないことは試合では出来ない。）

4　試合型練習（Ｍ-Ｔ-Ｍ型）を行う。

　Ｕ-１２の選手はどんなに体ｶﾞが大きくても子供であり、なんと言ってもゲームが楽しく、かつ成長への最良の方法であると位置づけ、試合をたくさん行う。試合とは必ずしも８対８の対外試合（親善試合、練習試合）でなくても4対4、3対3、1対2等でも自由に応用できる。ＭＴＭ理論（マッチ・トレーニング・マッチ）という練習メニューの基本を理解し、最初のマッチで課題を見つけ、それをテーマにトレーニング（基礎練習）し、最後に仕上げのマッチで確認を行う。

5　カテゴリー別ミーティングを毎回行う。

　練習、試合、合宿を問わず、カテゴリー内でミーティングを行い、『メニュー』『役割分担』『その他の確認』を行いその日の活動を始める。ユニット単位でも挨拶を行う。

6　対外試合の量はヘッドコーチが方針を出す。

　練習試合、招待試合等への参加はヘッドコーチを中心にその分量を方針として提案し監督と相談して決める。

7　クリエイティブな選手の育成を行う。教えすぎはだめ！

基　本方針である『個の育成』でもっとも重要になるのが『考える力』『工夫する力』を成長させることであり、『やらされるサッカー』になってはいけない。よって、プレーの結果を叱ってはクリエイティブな選手は育たない。パスをした選手に『そこはシュートだ！』というのはもっともやってはいけない指導である。それはテレビの前で怒鳴っているのと同じである。もし言うのであれば試合の切れ間（ハーフタイムや終了後）に『さっきのプレーだけどパスでなくシュートもあったんじゃないの？』と尋ねる。（ほとんどの場合、選手はシュートという選択肢があったことは解っていながらあえて裏をかいてパスを選択している。それが、その本人の視点、実力からして最適だと判断しているのである。指導者にそのことを説明できないのが子供である。）また、もし選手がその選択肢に気付いていなかったのなら、そのアドバイスは成果となる。

【組織・会議編】

1　監督の決定は最終である。

各学年（カテゴリー）には試合、練習の指揮をとるチーフコーチが中心となり、その内容はWakaba F.C.指導方針に則り、監督やコーチと相談してメニューが組まれることが望ましい。しかし、何かトラブルが起きたり、合議できないような事態が発生した場合は監督の責任によって決定する。

2　大会への参加、試合数の加減はヘッドコーチ中心に決め、監督の承認を得る。

公式戦、招待大会、練習試合、親善試合へ参加するか否かの最終決定者は各カテゴリーの監督とする。また、その試合の目的もヘッドコーチを中心に決める。基本方針でも定めているようにクラブは勝利至上主義とならず、あくまでも個の育成を目指すが、各カテゴリーの育成プロセスにおいて、柔軟に対応する。

3　東京都10ブロック関連大会は勝利を優先したベンチワークを行う。

基本は勝利至上主義的な指導を行わないが、勝利を目指すことは大切なことである。勝利への欲求は自然なことであるので、10ブロックに関係する大会は勝利を最優先で目指すことを全コーチで統一する。例え出場できない選手がいても、やりたくないポジションであっても、この大会だけは勝利を目指すことを優先した指揮執る。

4　監督・ヘッドコーチ会議、学年コーチ会議を徹底する。

Wakaba　F.C.の基本方針が理解されているか、逸脱するような指導はしていないか、現在の問題点は何か等を監督を中心に1～2ヶ月に一度集まり確認する。また、各カテゴリー内でも指導方針、メニューの確認を同程度行う。